

火葬場、祖母の棺が炉の中へと消えていき、煙突から煙が立ち昇る。よく見ると、空からは遺灰が静かに舞い降りている。次のシーンでは爆竹の煙にそれがオーヴァー・ラップする。さらには派手な爆竹の音は、祖母の娘が中華鍋で炒める唐辛子のパチパチという音に被さっていく。祖母から受け継いだ唐辛子ソースを黙々と作るその娘。葬祭から祝祭そして日常へ。人生とはこの繰り返しだ。それを冒頭で鮮やかに示して見せた。しかし、人が生きていくということはそんなに単純ではないことが、次のシーンで早くも示される。

母は祖母と祖父を同じ墓に入れるため田舎にある祖父の墓を移そうとする。しかしその実家には、まだ彼の最初の妻が健在で、村の人たちを味方につけ激しく抵抗するのである。元々は、親が決めた縁談。不作が続いたことから、祖父は出稼ぎに出たまま家に戻らず、そのまま祖母と結婚してしまった。最初の妻とは正式な婚姻届けを出していなかったようだ。村では決して受け入れられない祖母。それ故に2人を同じ墓に入れるためには、街にお墓を移す以外に方法がなかったのである。この作品のストーリーは、常に人々が移動することで成り立っている。縦と横の移動。縦の移動は時間軸、祖母の時代から母の時代、娘の時代。横の移動は場所である。田舎から地方都市、そして北京へと。彼らは、この間を移動しようとするが、それは容易ではない。

田舎のお寺に「貞節」と書かれた門が立っている。それがそれぞれの時代の女の生き方を鮮やかに示す。田舎に暮らす最初の妻は、おそらくそれをきちんと守り通してきた女。義理の親に仕え、最期を看取り、家を一人守ってきた。一方、娘にその意味を問われた母は「女は損だってことよ」と一刀両断にその言葉を切り捨てる。都会育ちで学歴もあり、天安門事件を知る彼女にとっては、田舎の古い慣習は疎ましいものでしかない。教師をしている彼女は、男女雇用の不平等を職場で訴えていたりもする。その娘はというと、母のそんな言葉を聴いても、何か腑に落ちないといった表情をしている。彼女は天安門事件を知らない。生まれた時から今の環境にある彼女にとっては、それが当たり前となっている。

人は歴史の中に生きている。その時の世相が個人の意識にも影響を及ぼしている。異なる世代間で話をする時、人は相手に歩み寄ろうと試みる。いわば時間軸を移動としようとするのであるが、それはかなり難しいことである。過去には決して遡ることはできない。そういう意味では、人はまるで2次元の世界にでも生きているかのようである。

遡れるはずもない時間軸だが、土地は過去を感じさせてくれる随一のものだと言える。先ほどのお寺の門の言葉もそのひとつだし、祖父の実家に行けば、昔ながらの生活がそこにはあり、家には生活の歴史が詰まっている。最初は、自分の勤めるテレビ局のネタになるかもと、安易な気持しかなかった孫娘が、祖父の実家を度々訪れ、彼の最初の妻であるおばあさんと一緒に過ごすうちに、気持ちを理解し始める。なぜ、わずかな仕送りの手紙を後生大切にしているのか。なぜ、祖父のお墓に彼女が固執しているのか。家に刻まれた歴史を見つめ、はぎ取ってみると、そこに決して理解不能な老女ではなく、自分とそう大

きくは変わらない1人の女性の姿が見えてくるのである。

自分の立ち位置からは見えなかったものが、田舎へと移動することによって見えてくる。自分の立っているところからその人が生きてきた時間を見ようとしても、点でしか見えなかったものが、位置を変えると線に見えてくる。それは縦軸である時間を下から見上げても何も見えなかったものが、横軸すなわち場所を移動させることによって、斜めの角度から線として縦軸を眺めることと同じなのではなかろうか。2次元のものの見方から3次元の見方への転換と言ってもいいだろう。さらには、田舎に移動する、自分の立ち位置から離れるという行動は、同時に自分のいた場所、そこにいる母親の姿を見つめ直すことにも繋がってくる。彼女が家を出ようとした行動には、田舎での体験が少なからず影響を及ぼしていたはずだ。結局、祖母、母、孫娘の世代の和解には、それぞれが相手のいる場所に向かって移動することが、必要不可欠だったのである。時間軸の1番下にいる孫娘が、その触媒の役割を果たしたというのが面白い。まだ束縛されるものが少なく、価値観も固まりきっていない若い彼女だからこそ、自由に横移動することが可能だったのだろう。人はその地を訪れ、人と話をする事で初めて理解できるし、それは今までの自分を見直すことにもつながるのだ。これは台湾に生まれ、香港、ニューヨークで育ち、香港映画で活躍し、今また中国でも映画を作るシルヴィア・チャンが、その人生の中で培ってきた“移動の人生哲学”といったものなのかもしれない。